



テロ対策と疫学 —他分野の知見の活用—

米欧ロシア研究室 所員 武田 幸男
 第 184 号 2021 年 8 月 24 日

NIDS コメンタリー

はじめに

近年の研究においては、一見すると関係のない他分野の知見や研究成果が、参考にされたり活用されたりすることがある。学際的な研究が新たな知見を生み出している現在の研究の中から、本稿では、テロ対策研究への疫学（epidemiology）の知見の活用について紹介したい。

1 日本におけるテロ及びテロ対策への認識

本稿の出発点として、最も一般的な定義を参考に、テロリズムを「暴力等を行行使することで民衆に恐怖を発生させ、主として政治的な目的を達成しようとする思考様式」とし¹、テロを「テロリズムに基づき実行された行為」と定義する。

この時、テロに関する日本での一般的な認識としては、テロは避けることが困難な理不尽な暴力であり、犯罪行為の一種とされる。その上でテロ対策とは、警察等の法執行機関による犯罪行為の取締まりであり、特にテロを対象としたものとなる。テロ対策の最終目標はテロの根絶、もしくは可能な限りの未然防止や被害の局限となる。また、テロを実行するテロリストについては、その被害を受ける一般市民との間に大きな隔絶があるとされる。

2 疫学の知見の活用

前項の一般的なテロ対策に関する認識に対して、疫学の知見を活用したテロ対策においては、そもそもテロリズムの捉え方が大きく異なる。

ここでは、テロリズムは病気のようなものであり、テロを完全に避けることは困難であるも、管理が可能とされる。その上でテロ対策とは、発生した病状（テロ）又は発生が予想される病気（テロ）に応じた予防と治療となる。テロ対策の最終目標はテロの管理であり、テロの根絶としない理由は、テロリズムやテロの根絶が実現不可能な目標だと認識されているからである。また、テロリストと一般市民との関係については、一般市民がテロリズムという思考様式に感染してテロリストになってしまうケースを考慮し、テロリストと一般市

¹ Routledge のハンドブックに提示された数十の定義を基に、筆者が定義した。Schmid A. P. eds., *The Routledge Handbook of Terrorism Research*, Routledge, Oxon, U.K., first published in paperback 2013. の第 2 章 pp.39-157 を参照。

民とを全くの別物だとは考えていない。

3 Stares and Yacoubian の研究

この考え方を最初に提示した Stares and Yacoubian は、テロ対策への疫学の知見を活用することの利点を、以下の 3 点とした²。

- ① テロの動向の理解に活用が可能：テロの中心はどこか、どのように派生し伝播するのか、どのような人の感染リスクが高いのか、社会のどこがなぜ感染しやすいかについて、注目するようになる。(すなわち、テロリストを排除すれば解決といった単純な問題ではないことを、テロ対策の関係者が理解するようになる。)
- ② テロの原因分析及び未来予測に活用が可能：テロは突然に発生したり拡大するものではなく、人と思考様式と環境との間で生まれる。その原因及び将来を網羅的に分析することで、(テロの発生に関する)未来予測が可能となる。
- ③ テロの管理が可能：(病気と同様、発生の阻止や根絶は不可能であるが、)管理は可能である。ただし、システムティックで多面的かつ長期的な努力が必要となる。

その上で Stares and Yacoubian は、テロ対策における対処方針を 3 点に分類して提示した³。

- ① 阻止：テロリズムという思考様式及びテロリストの侵入を食い止める。合わせて、テロの非合法化、反対の価値観(テロを忌避する規範)を普及させる。
- ② 防護：弱い人々や、社会的に重要な部分に集中的に対処する。(すなわち、テロリズムという思考様式を受け入れやすい若年層への教育を重点的に実施するとともに、社会的に重要なインフラや施設を集中的に防御する。)
- ③ 治療：テロリストを排除し(テロリストの非過激化、社会への統合)、テロの原因を減らす(経済格差の是正、雇用の創出、政治参画の拡大など)。前項の一般的なテロ対策に関する認識に対して、疫学の知見を活用したテロ対策においては、そもそもテロリズムの捉え方が大きく異なる。

4 Price の研究

前項の Stares and Yacoubian の考え方を基点に、研究を進展させたのが Price である⁴。Price が指摘した事項で Stares and Yacoubian と大きく異なるポイントは、特に発生してしまったテロへの対処として、Stares and Yacoubian が cure (完治=完全な回復)、すなわちテロリズムという思考様式の撲滅や、現れたテロリストの排除としていたところ、Price は remission (寛解=病状の収束)、過激化してしまった思考様式や現れたテロリストの抑え込みを目指した点である。

² Stares P. B. and Yacoubian M., “Rethinking the “War on Terror:” A Counter-Epidemic Approach”, Conference Papers, International Studies Association, 2006 Annual Meeting, p.5, 2006.から、筆者が作成した。なお、() 内は、説明のために筆者が加筆した。

³ Ibid., pp.9-12 から、筆者が作成した。なお、() 内は、説明のために筆者が加筆した。

⁴ Price B. C., “Terrorism as Cancer: How to Combat an Incurable Disease”, *Terrorism and Political Violence*, Vol.31, No.5, pp.1096-1120, 2019.

この違いは、テロリズムに対する両者の捉え方に起因する。両者ともテロリズムを病気として捉えていたが、Stares and Yacoubian は、テロリズムをインフルエンザのような感染性の病気と認識したのに対して、Price は、テロリズムをガンのような慢性的な病気と認識した。

このため、Stares and Yacoubian は、病気への対応方針を提示する際に、予防策に関してはインフルエンザウイルスへの感染や伝播の阻害（消毒や予防接種、マスク等の防護措置の実施）、対処策としてはインフルエンザウイルスの殺菌（投薬）と整理した。これらをテロ対策に当てはめると、テロリズムの思考様式を社会に浸透させず、テロを実行させないように、特定の思考様式やテロリストの侵入を阻止するとともに、発生してしまったテロリストについては排除が必要となる。しかし Price は、Stares and Yacoubian のような対応は過剰であり、思考様式の封殺やテロリストの排除には際限がなく、排除を継続していけば、母体となる社会全体を殺しかねないと指摘した。

そこで Price が提示した対応方針は、ガンの治療で使用されるステージングシステムの導入である。テロリストの活動が拡大していくときには、ガンと同様に一定の方向性が観察できることから、それぞれの段階に応じた対処を実施すべきと主張した。このステージングシステムにおいて、テロリストはその活動によりステージ 0 からステージ IV へと分類され、各ステージにおけるテロリストへの対処は以下のように整理される（下表参照）。

【表】 Price のステージングシステム

ステージ	概要	対処の例
0	テロリズムの思考様式を持つが、テロは実行していない	テロの実行阻止に向けた活動（情報収集）で対応
I	国外でテロを実行している	現地法執行機関の支援で対応
II	国外でテロを実行しており、地域の不安定要因となる。国内でもテロ実行の可能性有	現地法執行機関の支援、非動的活動（資金封鎖）等で対応
III	国際的なテロ組織で、当該地域の国家権力に対抗。国内でのテロの能力と意思有	必要に応じて動的活動（軍事行動）等で対応
IV	国際的なテロ組織で、拠点を置く国家の支援の可能性有。国内でのテロの能力と意思有	動的活動（軍事行動）等を含むあらゆる手段で対応

（筆者作成）

その上で Price は、テロ対策においては、ステージングシステムを用いた早期の評価と適切な対処が重要と指摘した。対象となるテロリストの影響度及び優先度を前述のステージングシステムにより判定し、法執行に従事する関係者間で共有する（場合によっては民衆とも共有する）とともに、具体的なテロ対策を実行していくことで、テロリズムという病気の管理が可能になると提言した。

テロ対策に疫学の知見を活用する場合には、二つの長所がある。

一つは、テロリズムを病気に例えることで、その動的な側面を認識できることである⁵。テロリズムの思考様式やテロリストであるか否かの在り様は、固定されたものではない。誤解されやすいことではあるが、ある人が常にテロリズムの思考様式を是とする又は否定するとは限らない。人の思考様式は、常に変化している。また、肯定や否定の度合いも明確に分割することはできない。そして、評価の度合いも変化する。あたかも、病状が刻々と変化するように、テロに関する思考様式や評価の度合いが変化することを、疫学の知見は気づかせてくれる。また、病気が多くの人に感染可能であるように、テロリズムの思考様式が誰にでも影響を及ぼし得ることを、この疫学の知見は私たちに知らしめる。

もう一つの長所は、病状に応じた段階的な対応を想定しておくことで、テロへの対応方針を事前に具体的に検討でき、網羅的な対応を実情に即して実践していけることである。つまり、対処の事前準備が可能となる。

また、日本においては、テロは犯罪であり、テロリストは逮捕・収監され、社会復帰は困難との認識が一般的である。この認識に基づけば、取り締まりの対象と対象外は明確に区分され、取り締まりの対象とされない限り、対処されることはない。ステージ0に区分されるテロリズムの思考様式を持つが未実施の人たちについては、対処の埒外とされる。だが、Price のステージングシステムにおいては、テロリスト未満の人たちも視野に入れられており、社会全体を想定した網羅的な措置が可能となる。テロリズムやテロリストの動的な性質を考慮すれば、テロリスト未満も含めた段階的かつ網羅的な対応が必要であり、これにより初めて、現実に即した対応が検討できるようになる。

その一方で、テロ対策と疫学の交わる学際的な研究において、未だ言及されていない事項も多い。その一つは、テロの未然防止に係る事項である。Price はステージングシステムを提示したが、これはテロ及びテロリストへの対処に関する枠組みであり、病気に例えれば、その治療に該当する。病気の予防、すなわちテロの未然防止に関しては、具体的な提案ができていない。また、ホームグロウンのテロリストや、既に米国に存在している環境保護を主目的とするテロリスト等への対応についても、明確な言及がない。Price のステージングシステムでは、ステージ0の次の段階のステージ I において、国外でのテロが想定されている。すなわち、アメリカ国外で発生したテロリストが、その活動の場をアメリカ国内に拡大していくことが、テロの過激化として認識されており、これに応じた対処の強化が示されている。しかし、アメリカで生まれ育ったホームグロウンのテロリストや、既に存在している環境保護等を過剰に強調するテロリストは、この分析枠組みでは捉えることが難しい。これらの事項の分析も含め、当該研究分野の今後の進展が望まれる。

(2021年8月19日脱稿)

⁵ Hatton A. T. and Nielsen M. E., “War on Terror’ in our backyard: effects of framing and violent ISIS propaganda on anti-Muslim prejudice”, *Behavioral Sciences of Terrorism and Political Aggression*, Vol.8, No.3, pp.163-176, 2016. 認識はあくまでも認識に過ぎないが、行動に及ぼす影響は大きいことが指摘されている。

プロフィール

profile

地域研究部

米欧ロシア研究室

所員 2等空佐 武田 幸男

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通 : 03-3260-3011

代 表 : 03-3268-3111 (内線 29171)

F A X : 03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.mod.go.jp/>